

ゴビンダ通信

No 6

発行：無実のゴビンダさんを支える会
事務局

Justice for Govinda

- Innocence Advocacy Group

October.30.2002

芽ばえた愛を 育んで！

～今日は、昔のこと、何となく思い出すだけ、書いてみます～

私は、1966年6月25日、ネパール東部のイラムという町に生まれました。カトマンズ（首都）から、およそ500kmの所です。この町には、No. 9までの行政地区があります。私が生まれたのは、No. 4の地区で、私のお父さんは、ここの地区長です。我が家は、この地区で一番、お金持ちで、畑などたくさんあります。私の家族、みな教育を受けています。

私には、5人の兄弟姉妹がいます。一番上から、お兄さん（Indra）、お姉さん（Urmila）、お兄さん（Japan?）、私（Govinda）、そして妹（Radhika）です。Japanというお兄さんは、死んでしまったので、見たことはありません。どうして、Japanという名前だったか、お母さんに聞いたこともありませんが、面白いですね？

昔から、うちには、いつも2頭の牛、いました。子供の頃から、美味しい牛乳、バター、ヨーグルトなど、沢山食べて育ちました。私の教育は、ハイスクールのクラス10までです。学校行っても、本など読むこと、あまり興味なかったです。でもスポーツするのは、大好きでした。

だから、高跳び、サッカー、バレーボールなどでは“District Champion”です。沢山のメダルや表彰状、あります。

私は、子供時代から、とっても穏やかな人間です。タバコ吸ったことも、お酒飲んだことも、ありません。ハイスクールのクラス10で学校やめてから、およそ2～3年、うちの仕事（農業）してました。その後、ラダさんと結婚しました。ラダさんとは、子供の時から、ずっと友達です。少しの間、離れたこともあったけれど、子供の時から、二人の間に、愛が生まれていたから、恋愛結婚しました。

今から12年前です。結婚してから2年の間に、二人の女の子、生まれました。名前は、MithilaとElisaです。小さい娘（Elisa）は、私が日本来る時、まだ2ヶ月の赤ん坊でした。だから、私の顔、写真でしか、見たことないです。そんな可愛い子供たち、素敵な奥さん、大切な両親、家族、友達……自国を離れてから、もう9年以上になりました。だから、この寂しい場所で、こんな悪い状態にあって、家族や自国のこと、たびたび思い出して、すすり泣くこと、続いています。だから眠れないです。何も悪いことしてない、「無実の人」、なぜ早く出さないで、ずっと牢獄に閉じ込めますか？助けてください。お願いします。

（*原文はローマ字です）

無実のゴビンダ・プラサド・マイナリ

2002年10月4日東京拘置所にて

支える会 活動報告！

☆学習会報告 ～ 輿掛さん、苦闘の14年間を語る ～

10月の学習会は、「みどり荘事件」の冤罪被害者、輿掛良一(くつかけりょういち)さんをお招きして、冤罪を晴らすまでの14年間にわたる貴重な体験をお話いただきました。『大分・女子短大生殺人事件』の著者、小林道雄さんも出席してくださいました。

事件の概要、取調べの状況、裁判の経緯などについて説明した後、「支援活動が、本人と家族にとっていかに大きな励ましになるか」について、次のように語ってくださいました。

～～はじめから警察に単独容疑者扱いされ、地元紙にも「犯人視報道」された上、一審で有罪判決が出たのだから、世間の人々は、自分が犯人だと思い込まされていた。二審のはじめの頃まで、家族と弁護士の4人の孤立無援の裁判闘争だった。

ところが、小林道雄さんの月刊誌への執筆がきっかけとなり、弁護団が世論に訴える方向に動き出すと、支援者が傍聴席を埋めるようになった。市民の熱い視線に、裁判官の対応が目に見えて変わった。拘置所にも、見知らぬ人から励ましの手紙が届いたりするようになった。

こうした文通や面会、差し入れという支援者との交流を通じて、それまで冷たい世間を恨んでいた自分自身も変わることができた。世間を避けて逼塞していた家族も、集会に参加して支援を訴えるまでになった。拘置所の辛い日々を耐え抜くことができたのは、このような支援者の励ましによるところが大きい。外国人であるゴビンダさんにとって、拘置所での生活が、どんなに辛いかは容易に察することができる。最後まで彼と家族を支えてあげてほしい～

そのほか、「21年前自分が取調べを受けた当時と、警察の体質が変わってないので、裁判への市民参加が実現しても、初めに作成される調書そのものに問題がある」として、代用監獄の廃止、取調べ過程のビデオ撮影の必要性を強く訴えておられました。

現在、輿掛さんは、仕事のかたわら、薬害エイズ訴訟やハンセン病訴訟の傍聴支援をしておられ、14年間の体験を、人権侵害や権力犯罪の被害者のために役立てたいと語られました。この学習会のため、仕事を休んで大分から来て下さったことに、心から感謝いたします。(客野)

11月の学習会 『穂高折檻死事件 ～ トクナガさんも無罪勾留された！』

ブラジル国籍のトクナガ・ロベルトさんも、ゴビンダさん同様、一審無罪なのに勾留されたまま、高裁で逆転有罪になり、現在、東京拘置所から無実を訴えて上告中です。

◆11月22日(金) 午後7時～9時 ◆弁護士会館5階508AB号室

○ 講師 : トクナガさん弁護団 鈴木 剛 弁護士

☆ 支える会からのお知らせ ☆

■事務局会議 (毎月第2火曜日 午後7時～9時)

次回は11月12日(火) 現代人文社: 信濃町下車徒歩5分

会員の方ならどなたでも参加出来ます。知恵を出し合って支える会を運営していきましょう。

無実のゴビンダさんを支える会 事務局

東京都新宿区信濃町20 佐藤ビル201 現代人文社気付 留守電・FAX 0426-37-8566

e-mail: mainali@anet.ne.jp ホームページ <http://www.jca.apc.org/~grillo>

体力づくりに励むゴビンダさん

雪冤に向けての重要な闘いの一つ

国民救援会中央本部 山田 善二郎

10月16日、瑞慶覧さんと一緒に、東京拘置所のゴビンダさんを訪れました。不自然に太りすぎるのを抑えるため節食していると聞いて心配していたのですが、面会した時の彼の体つきは、以前に比べて引き締まってきたように見受けられ、安心しました。

ラジオ体操や腕立て伏せなど「体力づくり」に心がけているという彼の言葉の奥には、不自由な勾留生活に耐え抜いて、なんとしても最愛の家族のもとに帰るのだという強い決意と、そのために注いでいるひたむきな努力が感じられました。「体力づくり」も、雪冤に向けての重要な闘いの一つであると自分に言い聞かせ、真剣に取り組んでいるのだといえましょう。

この夏、瑞慶覧さんがネパールを訪問したときに写した、故郷の山々や彼の帰りを待つ家族たちの写真を見せながら、ゴビンダさんは、終始、笑顔を崩さずに話していました。「支える会」の皆さんが、日々、力を注いでおられる激励の面会や手紙が、真実の勝利への希望を強め、それに向かって進むべく、彼に限りない励ましを与えているのではないのでしょうか。

私たち国民救援会が全国大会で支援決議をした直後、客野さんたちからそのことを知らされたゴビンダさんが、非常に喜ばれたということを知りました。また、ご家族の方々はじめ、この事件に胸を痛めている多くのネパールの同胞から、私たち救援会に強い期待が寄せられているということもわかりました。みなさんの期待に応じてゴビンダさんの無罪を勝ちとり、一日も早くご家族が待ち焦がれている故郷イラムに帰る日を迎えるために、救援会として何をなすべきか、責任の重大さを痛感させられています。

瑞慶覧さんが写したイラムの写真の中には、彼が日本で営々と働いて仕送ったそのお金で建てた家があります。その家の二階の窓にはカーテンが見られますが、三階の窓は真っ暗になっています。いわれない汚名をかぶせられて逮捕され、いらい権力によって今日まで自由を奪われて仕送りが不可能になってしまい、未完成のまま取り残されているのだとのことでした。

一日千秋の想いで父親の帰りを待つ二人の少女の姿には、どこことなく寂しさが漂い、深くしわが刻み込まれたご両親のそれには、苦悩の色が浮かんでいます。

「時間です」。職務上やむをえないのですが、人の情けのかけらほども感じられない看守の面会終了を告げる冷たい一言です。

名残惜しそうに看守に促されて席を立ちながら、ゴビンダさんは言いました。「助けてください」。そして、閉まりかかるドアの向こうから私たちに振り向いてもう一度、私たちに言いました。「どうぞ、助けてください」。

別れ際に彼の口から訴えられるこの言葉には、真心がこもっています。この真心を私たちの心として、最高裁に向かって言いましょう。「真実を守ってください」「無実のゴビンダさんに無罪を」「日本の裁判に正義を」！

以上

